

明日をつくる人と地域の情報誌

Co-CREATION

FREE ご自由にお持ちください

Vol.3

「よい加減」の介護を目指す
住宅街のアットホームな
デイサービス



家づくりから
まちづくりへ
長家・家守・大工の組合



地域社会の担い手は
OJTで育てましょう

地域の明日をつくる フツウの人たち



高齢化する団地に育つ
支えあいの仕組み
子どもの居場所とスーパーの
機能を併せ持つ
〈地域ねっとわーくせんたー・
ごえもん〉の試み



日光市の市民活動の
これまでとこれから

ドイツの
ソーシャル・ファーム
障がい者の労働市場創造と
コミュニティへの統合戦略

高齢化する団地に育つ

支えあいの仕組み

子どもの居場所とスーパーの機能をあわせ持つ
 〈地域ねっとわーくせんたーごえもん〉

駄菓子屋から居場所まで

「地域ねっとわーくせんたーごえもん」は、二人の地域住民によって立ち上げられたスーパー兼地域の人の居場所である。
 地域のボランティアに支えられながら現場を取り仕切る費田さんと、現在は現場からは外れたが、週末のアウトドア教室では相変わらず活躍中の橋本さん、通称「善平（ぜんべい）」が発起人だ。
 宇都宮市内のニュー富士見ヶ丘団地にあるスーパーの跡地を、費田さんたちが自腹で借りたのは、



「スタートして3年たって、関わってくれる人が増えた。もっと小さな場所を借りて家賃の負担を減らして駄菓子屋だけにすれば楽になるが、そうすると、高齢者も大人も子どもも誰でも来られる場所にするのは難しい。ここでしかないことがある。」
 最近、「ごえもん」に「応援団」ができた。周囲の自治会の長が中心となって、後援会のような組織が結

支えあいの循環

半分で、あとの半分は、地域の人たちの居場所と子どもたちのためのスペースになっている。
 夕方になると学校から帰った近所の子どもたちがその場所で自由に過ごしていく。私設の学童保育のような様相である。毎日通ってくる子どもたちは、レジャ駄菓子コーナーの店番や値付けもこなす。



ほぼ三年前。
 「本当は、駄菓子屋をやりたいかったけど、駄菓子屋だけでは家賃が払えないから」施設の半分をスーパーとして営業して日銭を稼ぎ、表の自動販売機でタバコを売る。地場野菜は、地域の農家に費田さんが毎朝、仕入れに行く。
 一家の主婦でもある費田さんは、朝の仕入れが終わると、店番を地域

成されたのだ。すでにその数年前から、見るに見かねた地域の非営利企業がバックアップについて経営の指導を始めている。
 地域の人たちを支える費田さんと、その費田さんごえもんを支える地域の人たちの支えあいの循環が、時とともに少しずつその範囲を

のボランティアに任せて、いったん家に帰る。その間に店に立つのは、同じ団地の主婦たちだ。手伝ってくれた人たちには、「ごえもんチケット」でお礼が支払われ、チケットの点数で「ごえもん」で買い物ができる。「ごえもんチケット」は、「ごえもん」周辺だけで流通する、いわば地域通貨である。

子どもから高齢者まで誰でも来られる場所

費田さんが事務所で仕事をしていると、ひっきりなしに人が入ってきて、ひとしきり費田さんを相手にお喋りをしていく。
 「本当は、「ごえもん」に民生委員がカウンセラーが常駐してくれるとい

広がってきている。
 高齢化する住宅団地は、「ごえもん」周辺だけの問題ではない。価格帯が均一な住宅団地の住人は、年齢層が偏っていることが多く、開発当初は子育て世代が多くても、やがて子どもたちは独立して他の土地に居を構えて団地に戻ってくることは少ない。年齢層が偏った住宅団地は、やがていつせいに高齢化していく。
 その時に、お互いに支えあえるコミュニティをどうつくっていくのか。そのためのひとつの方法が、「ごえもん」で日々、地域の人たちとともに模索されている。



● 地域ねっとわーくせんたーごえもん
 〒320-0005
 栃木県宇都宮市横山1丁目11番22号
 電話：028-627-1782
 FAX：028-627-1783
 e-mail：info@goemon.jp

「よい加減」の介護を目指す 住宅地のアットホームな デイサービス

小山市の駅東、城東の住宅街のなかに、NPO法人あじさいの本部と、三カ所のデイサービス施設がある。あえて住宅地の中の小規模施設にこだわってきた「あじさい」について、NPO法人あじさいの統括管理者であり、同時にケアマネージャーとして現場でも活躍する菅野美加子さんにお話を聞いた。

小規模施設の複数展開

人口約16万人の小山市の中で、駅東の住宅密集地である城東は小山市でも人口が集中している地域のうちのひとつで、およそ3万人の住民が住んでいる。

「あじさい」が、ここ城東で宅老所をスタートしたのは、およそ12年前、大規模な施設で、職員の数もぎりぎりにしてマニュアル化していけば、経営効率はよくなっていく。しかし、あじさいは、あえてその道を選ばなかった。

「小さな施設の方が、マニュアルがないプラスアルファの部分を伝達しやすいし、思いを継承しやすい。利用者さんの色にあわせながら、寄り添っていく。専門家としての知識と、ボランティア、人と人が認め合うという感覚を同時進行で持っているのが「あじさい」っぽいんじゃないかと思う。」菅野さんはいふ。

老番館から参番館まで、現在3カ所のデイホームを運営している「あじさい」の施設を地図上で見ると、狭いエリアの中でつかず離れずの位置に置かれた拠点は、ちょうど開基の布石に似ている。施設を大規模化していくのではなく、アットホームな小規模施設を複数つくっていくのが「あじさい流」のようだ。

住宅街の人のための生活を重視

狭いエリア内での小規模施設の複数展開と同時に、「あじさい」が重視してきたのが、住宅街でのサービスの提供である。住みなれた地域

前のことだ。宅老所から始まった「あじさい」は、介護保険制度の開始にあわせてNPO法人化して介護事業者となり、まずは城東五丁目に拠点を開設した。小規模の介護施設は、小山市では「あじさい」初であったという。その後、城東地域の小さなエリアの中で、二丁目、五丁目、一丁目に一か所ずつ、計三カ所の介護施設を次々と開設してきた。

「あじさい」のデイサービス施設は、いずれも民家を改装した小規模なものである。段差解消の工夫や風呂場の入浴設備などがデイサービスであることを示しているものの、室内に戻ると床の間には書が飾られて、普通の生活の匂いがそこかしこから漂う。いわゆる「施設」といつ

たイメージからはほど遠く、近所のお宅にお邪魔したような雰囲気である。

複数の事業所を束ねる法人本部には喫茶スペースが整備されており、月に一回程度、各事業所の利用者が招かれて「あじさい喫茶」というイベントがおこなわれる。昔の喫茶店をほうふつとさせるコゲ茶の木肌を生かした内装に白熱等の穏やかな光の灯る「あじさい喫茶」で、利用者はコーヒートと手作りケーキでもてなされて、ひとときを過ごしていく。片隅に置かれたレトロな革調のソファの隣には図書コーナーとラジオが置かれていて、利用者と職員が同じソファに腰掛けて話に興じる。

介護保険事業者も事業者である以

で、家庭の延長としての日常を送ることのできる環境づくりには、車がなければ移動できない郊外よりも、駅や商店街に近い住宅街のほうが適しているという。

「やがて高齢になって、車に乗ったり自転車に乗ったりができなくなったりするとき、近くの商店街に自分で買物にいったりしてコミュニケーションしながら買い物したり、目で見えて買える範囲でお金を出して、人の中で生活ができる。」

近くに商店街や駅のある住宅街に「あじさい」は今まで意識的にとどまってきた。さらに、次の施設を開

設するときも、同じ城東に開設することを選んでいる。そして、新しい施設を開設するときは、近くに公園や幼稚園などがある場所を探してきた。

「保育園の園長先生が話されていた。お年寄り子どもは相性がいい。リズム、時間の感覚やペースが合いやすい。二丁目は近くの保育所との交流がある。」

「あじさい」のように、事務局的な機能などを複数の小規模施設のネットワーク化によって共有し、現場は小規模に保つていけば、小規模のアットホームなよさは残しつつ、大

規模の事務効率化の両方がある程度、満たすことができそうだ。さらに、同じ狭いエリアに拠点を増やしていけば、点を面にしやすくなる。

小規模な拠点を狭い地域の中で増やしていく、ネットワーク化によって利便性や効率性をはかるやり方は、介護保険事業に限らず、他の分野の活動にも応用ができそうである。他の地域で同じやり方で事業展開していくと、どこまでできて「点」が増えていけば、いずれ「あじさいスタイル」は「小山モデル」になっていくのかもしれない。



菅野 美加子 さん

特定非営利活動法人あじさい。統括管理者。ケアマネージャー（介護支援専門員）。老人保健施設での介護職経験を経て「あじさい」設立時より運営に関わる。

● 特定非営利活動法人あじさい

（本部：デイホームあじさい参番館）
栃木県小山市城東2-8-19
電話：0285-25-8256
FAX：0285-25-8257

1995年 任意団体デイホームあじさい 開設
1999年 特定非営利活動法人あじさい 県知事認証
2001年 デイホームあじさいⅡ 開設
2006年 デイホームあじさい参番館 開設

（参番館開設に伴い、あじさいⅠ→老番館、あじさいⅡ→式番館へ変更）

家づくりからまちづくりへ

家守・長屋・大工の組合

林科で学んだことを 社会で生かす

「登ったこともない山に登ってみたくて、宇大の森林学科に入りまして。とにかく林業がうまくいってないってことだけはわかったけど、最初は、だからどう行動しようというわけでもなかった。そのうち、日本の山の木で家をつくる運動があることを知って、これなら林業に貢献できるんじゃないかと思って大工になりました。でも、修行しているうちに、日本の家の寿命が30年っていうのを知っ

た。60年の木を使って30年しかもたなかったら、倍以上、足りなくなっていくわけでしょ、木が。」
日本の林業は、安価な外材に押されて産業としてなりたたなくなってきたのが現状だ。さらに、家を建てても、その寿命は約30年といわれている。ローンを返し終えた頃に

は家の寿命が過ぎて建て替えになる。建て替え時に廃棄される建材は産業廃棄物となり、環境面からもその問題が指摘されている。



坂本 靖二さん (大工)

坂本さんは宇都宮大学の森林学科を卒業後、五年前に烏山の棟梁に弟子入りし、大工になった。森林学科卒業生の多くが行政職を選ばなから、異色ともいえる進路選択の動機やきっかけから、まちづくりや大工のネットワークづくりに広がりつつある現在の活動について聞いた。



共同でできることも多くなるし、情報発信も効率的にできるようになる。でも、核家族になって、短いサイクルで建てては壊しみたいなのライフスタイルのなかで、ただ新築の木の家を売るだけでは足りない。それに、家を建てることのできる人が限られた人になってきている。」

長屋と家守で 地域の暮らしを守る

「貧しい人は助け合わないと生きづらくなってきている。昔は貧しくても家族の人数が多かったからなん

とかなったのかもしれないけど、単身世帯なども増えて、地域や家族だけではもう、担えなくなってきている。」

そこで、数年前から始めたのが「あなあき長屋プロジェクト」の活動だ。これは、今ある空き家や集合住宅など、活用されなくなった建物を再生して、水回りなど共有できる部分はある程度共有し、助け合いが可能なコミュニティをつくれるような器をつくるプロジェクトだ。

将来は、一度建てた家を末長く見守り、メンテナンスしていく「家守(やもり)」を地域に復活させて根付かせていきたいという。家守は江戸時代に家主に代わって土地家屋を管理・維持していく役割を担った管理者または管理機能のこと。

「自分が目指す家守は、利益を上げるための単発仕事ではなく、地域密着、顔の見える信頼関係の中で、継続的に地域の暮らしを見守っていくこと。新築を建てられなくても、

貸家やアパート、集合住宅に入る人が豊かに暮らせるためにあるのが長屋で、建てた家に長く住むためにあるのが家守。そうやって全体的にやっつけていかなきゃ、林業とか環境とか、社会の仕組みまで変えていけないんじゃないか。」

「昔はガリ勉タイプだった」という坂本さんが、森林から大工へ、そして大工からまちづくり活動へと、その考えと実践を広げたいきっかけはなんだったのか。

「初めは、大工だからまちなみや建築に興味があって、そこから入っていったけど、だんだん、中のソファの部分と『家をつくる』っているのはすごく関係してるんだなって、その関係性がみえてきた。それぞればらばらだったのがつながってきた。地域とか、家族とか、生活とか。そこにたどり着けたのは、わりと早い段階で人と出会えたおかげ。」

先日、宇都宮大学の林科の恩師の支援を得て、林科の学生対象に、大工の現場や市民活動についての講演をした。

「社会の仕組みを変えるなんて、とても一人でできることじゃないし、そういうことを支持してくれる層がいなきゃいけない。そのために

は情報発信しないと。自分から情報を出していくことで新しい情報も入ってくる。」

最近、まずは自分で出せるくらいの家賃の物件を借りて長屋を小規模に始めようと持ちかけたところ、事務所でも共同入居すると手をあげる仲間が出てきた。

「まずは自分で腹をきめて動けば、他の人も動いてくれる。人のつくった仕組みに乗るんじゃないかって、まずは自分が腹決めないとダメなんだ」と感じました。」

この春、坂本さんとその仲間による第一号の長屋「峰太志館(みねたしのかん)」が、宇都宮大学近くの民家でスタートした。



● 峰太志館 と あなあき長屋プロジェクト に関するお問い合わせ先

あなあき長屋プロジェクト事務局 荻野宛
宇都宮市峰1-28-11
TEL/FAX: 028-615-7615
E-mail: ntogn@nifty.com

あなあき長屋プロジェクト情報サイトURL
<http://taishikan.cocolog-nifty.com/blog>

共同社会を目指すには

栃木県生活協同組合連合会 会長
竹内 明子



殺人事件が日常的に起こる社会と なっています。これだけでもとても 深刻な問題ですが、更に闇が深いのは、ほんの些細な理由から人を殺したり、誰でもいいから人を殺したかったなどという動機からの殺人であったり、親、子、伴侶、兄弟姉妹、親戚と身内を対象にした人殺しが増えてきている点です。私達の住む社会はこんなにも荒廃してしまったのかと背筋の凍る思いがします。

週れば、私達の住むこの国は、江戸末期に鎖国を解き、諸外国との通商を再開した時、多くの外国人がやって来ました。その人達が皆、異口同音に言っていることがあります。それは、「日本の美しさ、人の優しさ、人情の深さ、誠実で節度ある態度」です。こんな話が残されています。あるオランダ人が中国地方を旅した時の話です。彼は、城下町の宿で「一週間ばかり地方に行きたいので貴重品を預かって欲しい」と頼みました。宿の主人は気軽にうなずくと、お盆に頼まれた貴重品を載せ、彼が泊まっている部屋の畳の上に置きました。オランダ人はそれに仰天して、鍵もないし大丈夫なのかと問

いしましたが、主人は「大丈夫です」とうなずくばかりであったそうです。それから一週間、地方を回って宿に戻ると、出て行った時そのままに貴重品は盆の上に置かれており、何一つとして不足した物もありませんでした。彼は日本人の正直さと誠実さに大いに驚いたそうです。また、旅の途中で出会った人の優しさや親切心、勤勉さにも心を打たれ、後に書いた旅行記の中で他の国では見られない美しい国民であると記しています。

江戸時代というのは、利便性や日々の糧から見れば、今では考えることができないくらいの貧しさの中で生活をしてきた時代です。しかし、この国を訪れた多くの外国人達が証言しているように、その時代の日本人は優れた品性を持った国民であったのです。その背景には当時、貧しさは日常のことであり、支え合うことで日々を暮らしていたということがあるのだらうと思いますし、江戸時代の二百五十年間の間に、戦争という集団で殺人を犯し、それが正義と叫ぶような最も野蛮な行為がなかったことも、人々に穏やかさと優

しさをもたらすことになったのだと思います。

厳しい身分の上下があり、日常に刀を持ち歩くの者がいても、百五十年前、我々日本に住む人々のルーツはこのような人間性であった訳です。今はもう百五十年前の人間性まで逆戻りはできないとしても、これ程までに悪くなり出したのはせいぜい四、五十年前でありましょうから、どうかそこまでは、その倍くらいの時間がかかるとしても取り戻すことはできるのではないのでしょうか。

そして、その人間性回復の為の基本となるのは弱い立場の人達への限りない優しさであると思います。例えば江戸時代には、障害を持った人は神様からの授かりものとして、優しく丁寧に育てられたそうです。そうした優しさは、我々自身が、現代に合わせて本当の意味でも人間として自立していく為にも必要なことだと思えます。お互いに智慧と力を出し合い、次の世代に少しでも良い社会をバトンタッチできるようにしていきたいと思えます。



数年前から、一般市民を対象とした政策のプランニング塾の仕事の相談を行政に持ちかけられることが多くなってきました。「行政主導」から「市民参加」へ、そして「参加から参画へ」といわれてきましたが、最近ではすでに参画では不十分になってきたようです。

今、市民が、自分たちで地域のニーズを調査・分析して、プランニングする能力の養成が社会から求められてきています。行政も、市民発の

市民社会の担い手は OJTで育てましょう

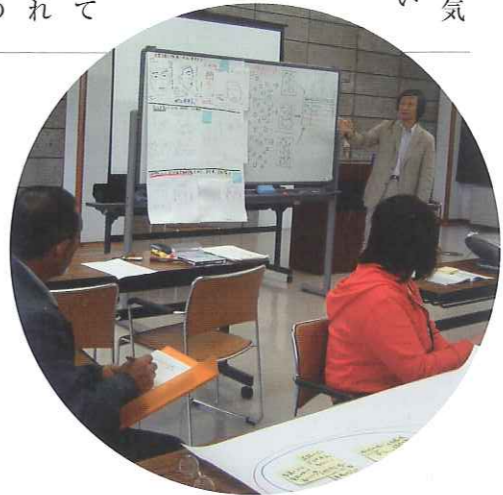
まちづくりプランナーの必要性に付き、育成しようとしてはじめています。

もちろん、そういった人材は研修やワークショップだけでは育ちません。ある程度の時間とOJTが必要になってきます。ただ、それは行政にはできません。

企業も残念ながら地域に目を向けていないようです。そうすると、だれがいったい人材育成をやっていくのかということになってきます。

地域づくりの担い手になることのできる市民を育てていくためには、地域や行政の立場、企業の立場などをきちんと知っていて、なおかつ地域に目を向けることができ、専門性と経験、ビジョンのある市民の集団が、現場で人材を育てていくしかないでしょう。

その意味で、とちぎ労働福祉事業団は、たいへん興味深い存在です。企業組合としてきちんと経営する能



力を持ちながら、同時に、持ち出しで地域のために活動もしている。こういうところが、今後は育成者になっていくのかもしれない。

組織形態は、NPOでも企業組合でもワーカーズ・コープでもなんでもよいのです。要は、ビジョンがしっかりしていることが重要です。

時代とともに社会のあたりは変わっていきませんが、それにあわせて組織のかたちなどを変えながら、ビジョンはしっかりと持っていて、基本

を変えない組織が生き残っていきま

す。

これから、地域間の格差がますます大きくなっていくでしょう。地方分権の流れのなかで、行政の力も市民の力も問われることになりました。そのときに、地域に密着して課題解決を支援する専門性をもつ「誰か」が必要になってくるのです。

コミュニティなんてべつにいいよね、となってきたのは高度成長期です。コミュニティの重要性を指摘して、その衰退を食い止めようとした政策ももちろんあったのですが、うまくいきませんでした。

結局は、人と人とのつながりがコミュニティをつくっていくのです。誰かの顔を知っているとか、そういう小さきやかなことです。きっかけくらいはできても、それを行政がくれるわけがありません。実際にコミュニティをつくっていくのはひとりひとりなのです。

陣内雄次さん

宇都宮大学教育学部
住環境・まちづくり研究室 教授

日光市の市民活動の これまでと、これから

市民活動をめぐる
三人の当事者による
対談

2006年の合併で、今市市、日光市、足尾町、藤原町、栗山村が合併して誕生した日光市。栃木県全体の面積の約22%を占める日光市は、市としては全国でも第三位の面積を持つ広大な自治体だ。そして、栃木県が認証したNPO法人数2008年2月現在407法人のうち、36法人が日光市にある。日光市

の人口は9万5千人弱なので、約2、632人に1法人の割合。宇都宮市を例にとると、人口50万7千人に対して117法人なので、約4、453人につき1法人の計算だ。世界的な観光地も限界集落も抱える広大な土地を舞台に、都市部以上に活発な動きを見せる日光市のNPOや市民活動の現状を、14年前に宇都宮市から転入し定住した日光市議会議員の平木さんと、日光市民活動支援センター職員の前田さんに聞いた。

日光・今市エリアの 市民活動の現況

日光・今市地域は、とくにソフト中心の市民による事業を、ネットワークを駆使しながら数多く興している地域という印象があります。なぜこの地域がとくに県内で活動が活発なのか、その要因は为什么呢。

平木…以前、宅老所に県と市が補助してくれ



巻き込まれてくるという感じですかね。

組織というのは、例えると細胞の集まりで、それが常に分裂しながら全体でひとつのものをつくっていくというイメージがあります。そうやって集まったり分裂しながら成長して、全体としてこのエリアの市民活動が活性化しているという状況でしょうか。

だけでも80団体くらいありますから、法人格を問わなければ200団体くらいのNPOがあるでしょう。全部ではないですが、新興住宅地に住んでいるなど、よそから来た人が立ち上げの中心になるケースが多いですね。よその状況を知っていて、そういったものを地域に持ち込んでくる。逆に言うと、つながりがない分、どうしようもなくて、そういう状況に置かれることで、自分たちで助け合わなきゃ、みたいになるのかもしれない。それに周りの地域の人も

平木…本当に必要とした人たちが、もうひとつの自治体というか、ゆるやかにネットワークを組んで繋がっていきます。たとえば、同じような問題を抱えている障がい者の親同士が、住んでいる場所は遠いけど手をつなぎ合う。そういうことでもいいと思うんですよ。地縁でつながることができればいいのですが、それが必ず近所できるとは限りませんから。一方で、地域のまとめ役として自治会など伝統的組織の役割も重要であると思いますがいかがでしょうか。

る制度があったことで、市内で4つくらい宅老所ができました。それが発端となって福祉系のNPO法人が増えたんです。宅老所への補助は県の補助事業でしたが、市も半額の補助を負担しますから、市の協力なしにはできません。おそらく、これからは市民もやらなきゃみたいな感覚を、行政がかなり早い時期から持っていたのだと思います。行政に非常に恵まれていたですね。NPOに対する市独自の貸付金制度もできて、それがけっこうNPOを育てました。行政が動いたら今度は市民が動く、また行政がという両輪があったからこそ、結果としてNPOが増えてきたのでしょう。

きっかけとなる活動が始まることで、NPOや市民活動に興味を持つ人たちが結集してきますよね。最初、池に石を落として波紋を広げる役割を負う人がいて、そこに人が集まってきた、さらに波紋が大きくなっていくというような。活動を通して地域のなかに目を向ける人たちが増え、また新たな芽が生まれて、同じことをやり続ける人や新しいことに取り組む人たちが増えてくるのが一番望ましいと思います。その循環が、この地域ではうまく機能した結果、NPOが増えたのかもしれないですね。NPOの数や活動の種類の広がりについてはどうでしょうか。

前田…市民活動支援センターに登録している

平木…自治会長の経験者などは、やはり懐が深いですね。それこそ夫婦喧嘩の仲裁までやりながら人をまとめてきた人たちですから。まあ、しゃあねえべ、みたいな感じで受け入れていく。地域のリーダーというだけあって人望があるし、それが裏打ちされているのが、付き合うとわかります。

今までの自治会運営や地域の協議会の中心になってきた人たちと、後から来たNPO関係者との融合の状況としてはいかがですか。

平木…やはり時とともに融合してきているのを感じますね。それに、今はもう、自治体のトップが、行政だけではやりきれない、NPOやボランティア、市民の力で、というようになってきている。加えて、「NPO」という言葉が、良きも悪きも頻繁にマスコミなどで使われるようになって市民権が出てきた。加えて、近所の人がNPOで働いていたり、自分でNPOのお祭りにいったりすると、親近感がわいてくる。自然とNPOに関わる人たちの人数が増えてきて、融合しやすくなってくるんです。

顔の見える距離で集うことが次のものをつくる

地域の伝統的な組織と、新興ともいえるNPOなどが融合していくためには、現場として

平木 ちさこさん

「とちぎボランティアネットワーク」、家事援助・介護サービス「ウェーブ」の設立など、ボランティアやNPOの市民活動に深くかかわってきた。現在、県内のNPO法人15団体の会員。2006年より日光市議会議員。

前田 利一さん

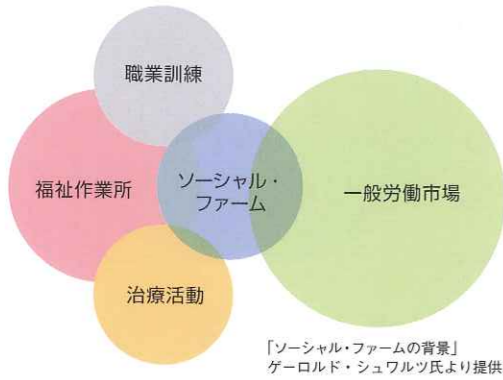
日光市民活動支援センター・センター長。NPOおおきな木の理事・事務局長として日光市民活動支援センターの運営に携わり日々ボランティア・NPO支援を行っている。2006年よりセンター長就任。他に支援業務の中からつながったふれ愛の森など、5団体のNPOの役員として活動している。

聞き手 佐藤 賢二さん

企業組合とちぎ労働福祉事業団理事長

ドイツのソーシャル・ファーム

障がい者の労働市場創造とコミュニティへの統合戦略



ソーシャル・ファームは、障害者など社会的に排除されやすい人々たちを、一般労働者として雇用しながら市場におけるビジネスを志向する企業であり、ヨーロッパには、このような企業が1万社以上あるとされている。日本では、「社会的企業」と訳されている。近年、日本でも注目され始めた「ソーシャル・ファーム」について、おもにドイツのソーシャル・ファーム関連のホームページや、日本でのソーシャル・ファームに関する講演などを俯瞰しながら、そのアウトラインをレビューした。

(文責・翻訳：荻野夏子)

ソーシャル・ファームは、身体・精神・知的などの障がい者の雇用と、社会的自立を通じ、障がい者の労働市場の創出と地域コミュニティへの統合、すなわち「ソーシャル・インクルージョン」を目指す民間の社会的企業である。

ソーシャル・ファームにおける障がい者は、一般労働者と同等の労働賃金を得て、同じ義務と権利を有して継続的に雇用されており、その一般労働者に対する比率は25%~55%とされる。ドイツ政府は、投資補助金・貸付金、障がい者への給与支払いに関する財政支援、障がい者の低い生産性を補償するための補助、ビジネスコンサルティングを受けるための補助、非営利企業とみなすことによる税制優遇策などを通して、ソーシャル・ファームを政策的に支援しており、その結果、ドイツにおけるソーシャル・ファームの数は2005年で700事業所を超えた。そして、そこに雇用される従業員数は25,000人、うち13,000人が障がい者である。

ドイツ国内での実務上の支援体制も整っており、ソーシャル・ファーム専門のコンサルティング会社が、ドイツ全土のソーシャル・ファーム協会であるBAGによって設立され、ビジネスコンサルティングと研究・研修などを行っている。

個別の企業だけでなく、フランチャイズ方式による拡大も行われている。CAPは、福祉作業所の協同組合によって2001年に設立されたフランチャイズ本部で、ドイツ全土に障がい者を雇用するスーパーマーケットをチェーン展開している。CAPの加盟店は2007年末現在50店舗で、そこには300人を超える精神・身体・知的障が

い者が雇用されている。

障がい者が、労働者、納税者となることによる効果を、前出のドイツのコンサルティング会社FAFは、投入された公的資金の最高150%の金額が、税金および社会保険料として政府に償還されると分析する。これはすでに、補助というよりも投資というにふさわしい。

ソーシャル・ファームは、障がい者を切り口にしているが、社会的に課題を抱えているすべての人たちの社会的統合が理念上の原則である。その対象には、高齢者、母子家庭、ホームレスなど、様々な人たちが考えられるだろう。

社会的な課題を抱える人たちが自立していくためには、まず、それを支えるインフラが必要である。そのインフラが整備されることによって、万一、課題を抱えることになっても社会や労働市場から排除されず、コミュニティの一員として統合され、人として尊重されていく。課題を抱える人たちが生きやすい社会は、すべての人にとって生きやすい。

そんな社会の実現を、政策が支え、民間が現場で実践するドイツのソーシャル・ファームに、これからの私たちの地域が選びうる道の、ひとつの方向性が示されている。

●参考文献・ホームページ

- <http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/conf/seminar20070128/kicho.html>
ドイツにおけるソーシャル・ファーム 障害者のために有意義な雇用を創出するには ゲーロルド・シュワルツ
- FAF <http://www.faf-gmbh.de/www/start/>
BAG <http://www.bag-integrationsfirmen.de/>
CAP <http://www.cap-markt.de/>
Strategien fuer die Zukunft <http://www.pro-conzept.de/index.html>



平木…まず、声をかけていかないとダメだということ。やっぱり、いわずに相手には伝わらない。今は、言葉をかけたり、人が集うことが少なくなってきているけど、人が動いたり、人が集ったり、それはやっぱりダイナミックでいいことなんです。メールも書類もいっぱいあるけど、人の声がやっぱり一番。手問ひまかけて動いたり、電話をかけた方がいいのは、簡単にいえば人と人で情報が行き来していいってことなんだけど、それだけじゃなくて、次のものをつくる。次のものを生み出す力になる。

ようとか、言葉になって、次の新しい動きや活動を生み出すきっかけになっていきますね。

平木…そう。そしてお互いに相手の頑張る姿をみて、自分は自分の持ち場で頑張るくちやなあっていうパワーの交換ができる。あと、もうひとつ大事なものは、相手が落ち込んでるときになぐさめること。入院したらお見舞いに行くとか。ふだんはみんな忙しくて、

陰と陽なら陽の部分に追われて、なかなかそういうところに時間や気持ちを振り向けられない。でも、人が人を励ましたり、お互いの頑張る姿を見て力ももらったりするっていうのは、時間がかかることだけど、やっぱり大事なことはそれなんだと、最近ほほほほ思っています。

なるほど。そういうひとつひとつの人の繋がりが支えあい、最終的には大きな力につながっていくわけですね。そのためには、まず最初のきっかけが必要だと思わんですが、きっかけはどうやってつくりますか。

平木…活動の分野が違うからだめかな、と思っても、誘ってみると、思いのほか来てくれたりするんです。だからまずは、分野が違う人でも誘ってみますね。とくに地場ですっと生きてきた人たちと、NPO系の人が持つてくる資源や情報は全然違うから、そういう交流はすごく新鮮。すると、だんだんと相手も誘ってられるようになってきます。もちろん、せつかく誘ってもらってもいけないこともあるけど、「ああ、そういうのがあるんだ」とってわかるだけでも収穫です。だからこちらも、「忙しいだろうし、だめかな…」と思ってもまずは声をかけてみて、「なるほど、こういうのがあったらいいな」という努力は、

根気強くやってかきかきいけな。それぞれがこれまでの活動で培ってきたものや積み重ねてきたものを、それぞれに持ち寄って繋いでいく作業なのかもしれない。頑張っていかという段階に入ってきているところ、横の糸をあわせながら、それをどう重ねていくかという段階に入ってきているところなのだろうか。

平木…この間も知り合いに「視覚障がいのある人に蕎麦打ち教えられる人いないかな」といわれて、地場の議員に「蕎麦打ち教えられる人いないかな。しかも親切な人じゃないとだめなんだよ。」ってきいたんです。そうしたら「いるいる」とすぐに繋いでくれた。そういう、私が持っていない資源を彼らは持つていて、彼らが持っていない資源を私は持つてる。そういうのを織りなしていくと、あの、中島みゆきの「糸」ですよ。縦の糸と横の糸。「織りなす布はいつか誰かの傷をかばうかもしれない」。

そうだった、一見、異なる分野のつながりあいや融合が、日光・今市地域のように、やはり地域全体の市民活動を底上げし、活性化する力の源になっていくのかもしれない。

多様な
就職機会を
創出します

環境と福祉
に挑戦します

地域で暮らす
人た
ちを
支えます

非営利事業体
の連携を
強めます

地域のための
仕事を
応援します

もうひとつの
働き方を
提案します

- 障がい者等に対する就職継続支援、一般就労での受け入れ
- ジョブコーチによる支援
- 障がい者向け職業訓練、社会適応訓練の実施

- 環境負荷の少ないメンテナンス方法の提案
- ゴミ資源リサイクル
- 伝統木構法等、木の家づくりの研究
- 間伐材を活用した木製遮音壁の設置
- BIOケアシステム
- 福祉事業コンサルティング

- ハウスクリーニング
- ゴミの処分
- 便利屋仕事
- 高齢者等の困り事の解決
- 高齢者宅の住宅改修
- 段差解消・手すり付け等

- 総務経理サポート
- 非営利法人に対する運営支援
- 給与計算・会計記帳代行
- 労務管理・社会保険に関する相談
- 経営全般に関する助言

- ビルメンテナンス
- 廃棄物収集運搬
- 倉庫作業等、業務請負
- 建物営繕、軽土木工事
- 害虫駆除
- 公園清掃
- アパート巡回清掃
- 緑化事業・除草等



1988 創立

1990 企業組合法人格を取得
労働者協同組合として
組織を運営



人×夢＝仕事創造

企業組合 とちぎ労働福祉事業団

企業組合とちぎ労働福祉事業団は、年をとっても、障がいがあっても、地域で働き、生活し続けていくための労働者による協同組合です

● あると便利な電話帳 ●

NPO、ボランティア活動に関するご相談

- ★とちぎVネット 〒321-0027 栃木県宇都宮市埜田2-5-1 共生ビル3階 TEL : 028-622-0021
★宇都宮市民活動サポートセンター 〒321-0968 宇都宮市中今泉3-5-1 東コミュニティセンター内 TEL : 028-614-1112

福祉サービス、介護保険制度等に関するご相談

- ★社会福祉法人ふれあいコープ 〒321-0165 宇都宮市緑5-13-6 TEL : 028-616-6500
★特定非営利活動法人アスク 〒325-0074 那須塩原市松浦町118-189 TEL : 0287-62-4310

労働問題、社会保険制度、その他中小企業の経営全般に関するご相談

- ★社会保険労務士・中小企業診断士/田中義博
〒321-0152 宇都宮市西川田7-1-2 (企)とちぎ労働福祉事業団 TEL : 028-645-5561

コミュニティ・女性・子育て支援・ワークライフバランスなどの企画づくりのご相談

- ★TESiO(テシオ)/荻野 夏子 〒321-0942 宇都宮市峰1-28-11 TEL : 028-615-7615

〈事業団のグループ法人の連絡先〉

社会福祉法人美のりの里

- のん美里ホームながおか 〒320-0004 宇都宮市長岡町167-5 TEL : 028-622-7007 FAX : 028-622-7016
ありんこ保育園 〒320-0004 宇都宮市長岡町167-8 TEL : 028-622-5231 FAX : 028-622-5259
特定非営利活動法人あじさい
本部・デイホームあじさい参番館 〒323-0807 小山市城東2-8-19 TEL : 0285-25-8256 FAX : 0285-25-8257
デイホームあじさい式番館 〒323-0807 小山市城東1-8-9 TEL : 0285-25-3622 FAX : 0285-25-3629

〈その他の主なネットワーク団体の連絡先〉

- ◆特定非営利活動法人宇都宮まちづくり市民工房
〒321-0943 宇都宮市峰3-6-8 TEL : 028-634-9901
◆特定非営利活動法人とちぎ障害者労働自立センターゆめ
〒329-1231 塩谷郡高根沢町宝石台1-1-14 TEL : 028-675-7771
◆特定非営利活動法人わかば 〒329-1231 塩谷郡高根沢町宝石台3-5-6 TEL : 0285-675-8730
◆特定非営利活動法人ウィズ 〒320-0011 宇都宮市富士見ヶ丘2-17-9 TEL : 090-6175-2588
◆ちいきねっとわーくせんたーごえもん 〒320-0005 宇都宮市横山1-11-22 TEL : 028-627-1782
◆栃木県生活協同組合連合会 〒320-0052 宇都宮市中戸祭町821 栃木県労働者福祉センター6F TEL : 028-624-6550
◆栃木県中小企業団体中央会 〒320-0806 宇都宮市中央3-1-4 栃木県産業会館3階 TEL : 028-635-2300

企業組合とちぎ労働福祉事業団

- 本部・宇都宮事業所 〒321-0152 宇都宮市西川田7-1-2
TEL : 028-645-5561 FAX : 028-659-4959
E-mail : info@kyoudou.net
URL : http://www.kyoudou.net
小山事業所 〒323-0808 小山市出井1523-19 協栄流通(株)小山物流センター内
TEL : 0285-25-1805 FAX : 0285-25-1816